

褐色の祭り



二
紀彦 連城
Kenjiro Mikihiro

褐色の祭り

上

江苏工业学院图书馆

藏书章

彦城

かつしよく まつ
褐色の祭り(上)

一九九〇年十一月二十九日 第一刷

著 者 連城三紀彦 © Mikihiko Renjō, 1990

発行者 樋口剛

発行所 日本経済新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区大手町一―九―五

電話(〇三)二七〇―〇二五―一

振替 東京三―五五五

印刷 奥村印刷

製本 大口製本

ISBN4-532-09796-7

本書の無断複写複製(コピー)は特定の場合を除き、
著作者・出版社の権利侵害になります。

Printed in Japan

目次

遠い関係 5

もうひとりの夫 81

冬薔薇 145

海峡のむこう 281

装画 装幀
荒井富美子 菊地信義

褐色の祭り(上)

遠い関係

水色のカーテンをひくと、窓のむこうは夏だった。

眩しい光が空を果てしない広さにみせている。その光に焼かれ、東京の町は白く濁った海の底深くに沈んだ島のように見えた。ホテルの十四階の、ダブルベッドだけしか意味のないその狭い部屋が、海のどこか半端なところを沈むとも浮かぶともつかず、けだるく漂っているような気がした。

結婚して一年になる。夫と姑だけの小さな暮らしに慣れすぎた律子の目には、ふと恐怖に襲われるほどの広い空だった。

律子は、すぐ背後のベッドの端に座っている男のことも忘れ、しばらく窓ガラスが映しだす夏の白さに気もちを溶けこませ、放心したようにぼんやりと外を眺めていた。

「少し瘦せたんじゃないか」

男の声が背にかかった。

「さっきは全然変わっていないって言ったわ」

「いや、背中から見るとだいぶん痩せたってわかる」

男の視線が、麻のワンピースを剥ぎ律子の体の線を四年前と較べているのが背中で読みとれた。そう四年前だ。律子が部屋に入ると同時に宗田拓也は「五年ぶりだな」と言ったが、本当は四年前なのだ。昭和三十八年、律子が二十四歳の夏だったのだから。宗田の狭苦しい部屋で、宗田の長身と胸の厚さにもっと狭く閉じこめられながら、つけっ放しのラジオで南ベトナムに戒厳令がしかれたというニュースを聞いた。あの晩は雨が降っていた。蒸し暑い夜が汗をしばらく出したかのような雨で、汗まみれの男の体ではなく真夏の夜そのものに抱かれている気がしていた。あの晩だけではない。宗田の体はいつも雨を吸ったように湿っていた――

「何故来たんだ……」

立ちあがり、宗田は律子の肩ごしに手を伸ばしカーテンをもとに戻そうとした。それをとめようとして宗田の手首を律子は自分の手でつかんでいた。四年前の男に指一本触れるつもりはなかった。律子は反射的に手を離し、「それを今、自分でも考えていたところ」と言った。

「ただ、あなたに抱かれるために来たんじゃないことだけは確かだわ。四年前に終わった男のために家庭を壊すつもりはないもの」

「だったら何故来たんだ」

ふり向くと宗田の顔が目近にある。顔の半分に光が白い影のようにしみついている。切れ長の目は薄く笑っていた。この人の方は少し太ったな、律子はそう思った。

「だからわからないって言ったでしょう。あなたの方がわかってるんじゃないの。さつき絶対来ると思ってたって、自信ありげに言ったんだから。教えてほしいわ、何故私が四年前の男なんかに

逢いに来たのか……」

宗田はすぐには何も答えず、薄い唇の端だけでもう一度笑った。昔よりもっと嫌な笑い方をするようになった。律子はそう思った。

一昨日突然かけてきた電話で、宗田は名乗らずにただ「俺だよ」とだけ言った。それだけでわかるはずだという自信が声にあつたし、事実律子はすぐに四年前の男を思いだせた。

「二、三日ホテルに泊まっているから来ないか」

四年の空白など無視した馴れ馴れしい声に、唇の端だけの微笑を想い浮かべながら、律子は無言で電話を切った。来るつもりなどなかった。それなのに何故来てしまったのか。今日、正午すぎになって姑が不意に「鎌倉の妹のところへ出かけるわ。帰りは夜遅くなると思うけれど」そう言いだし、縞の着物に着替え始めた時、気がつくと「お姑さん、私も夕方まで買い物に出かけます」と声をかけていた――

「もちろんわかってるよ。君がここに来た理由は」

律子の胸中の疑問を読みとったかのように宗田は答えた。

「何故なの」他人事のように律子は訊いた。

「平凡な結婚生活など似合わない女だからだよ、君は。ああいう退屈な男を一生、夫と呼び続けて暮らしていける女じゃない。自分でもそれがわかってるからだ」

律子は眉間に皺を寄せて、肩を並べている男の顔を見た。宗田は横顔で窓の外に溢れた夏の光を眺めている。

「ああいう男って……あなた、夫のこと何か知ってるの？」

一昨日の電話では、律子が以前勤めていた大病院で今の電話番号だけを聞いたと言ったはずである。宗田はちらりと律子の顔を盗み見ると、逃げるようにまた視線を窓の外へ戻した。顔の薄い皮膚が光をまといっている。それが仮面でもつけているように見えた。

今年に入って間もなくだから、半年以上前になる。短大時代からずっとつき合っている友達に会った際、その少し前に興信所員のような男から電話がかかってきて律子のことを根掘り葉掘り訊かれたと言っていた。それがもしかしたらこの宗田ではなかったのか。

「今年の一月に、あなた安川っていう私の女友達に電話しなかった？」

宗田はその質問を無視すると、

「三十四歳。大手商社の課長。十年前、一年間函館の支社に転勤していた以外ずっと本社勤務。背が高い以外性格も容姿も人並み。趣味が釣りと旅行。小型の国産車一台と父親の代からの家をもっているが、家はガタがきているので銀行ローンで建て直そうか迷っている。そんな男と姑とだけの暮らしに似合う女じゃない、君は」

ひとり言を呟くように言った。その言葉で今の律子の質問を認めたのだとわかった。

「それなら私はどんな男と似合うわけ。あなたみたいな男？」

律子は言うと同時にかすかな嘲笑を宗田へと投げた。

「あなたとは一生どころか、半年も保たなかったじゃないの」

短大を出てから結婚するまで、律子はある大病院の受付で働いていた。病院に出入りする医大生がよく誘いの声をかけてきたが、律子は相手にしなかった。どれもからかい半分だったし、律子が一度首を横にふると、二度と声をかけてこなかった。「一度しか誘われることのない女の顔だ

わ」出勤前に化粧をしながら、鏡に向けてそう呟いたことがある。

子供の頃から「目はきれいだ」と言われてきた。黒いつぶらな少女のようなあどけない儼きをもった目である。ただ、高いが骨の細すぎる鼻と厚すぎる上唇と張りすぎた顎とがせつかくの目の儼きを殺し、全体としてはどこかに不調和を感じさせる顔だった。「美人だ」と言ってくれる人もいたが、律子は鏡を見るたびに自分の顔の欠点ばかりを探して美しさを否定し続けた。成人した頃からおぼろげに意識するようになったのだが、自分のようなブライドが高く勝気な女が自分が美しいと自惚れるようになったら普通の人生を歩けなくなる——それ自体が自惚れと紙一重の不安を抱いていた。それに確かに顔には欠点がある。細すぎる鼻すじが冷たい印象を与えるし、男たちに二度目の声をかけさせないのは、そんな印象のせいだろうと考えていた。

ただ、一人の学生だけは別だった。律子が断つても何度も声をかけてきて、夏が始まるうとしていたある日、暮色のおりた門の陰で、病院から出てくる律子を待ち伏せていた。上背のある、皮膚を褐色に焼いたスポーツマンとしか見えない青年だった。健康そうであり、真面目そうであり、何度となく誘ってくる執拗さにも危険より純粹さが感じとれ、ちょうど律子が、あと一回誘ってきたらお茶ぐらいはつき合ってもいいかもしれないと思うようになった頃だった。

「喫茶店で一時間も喋ってくればいいから」

何度も誘いながら依然どこちなさの残った声で言い、律子はためらいながらも最後には硬い微笑で肯いた。青年もかすかに笑った。喜んでいうというより暮色ににじんで、その薄い微笑は暗く、どこか不潔なものを感じさせた。一瞬だが、この人には似合わない笑い方をする、そう思ったのを今でも憶えている。

そんな薄笑いが、むしろ一番その青年らしい表情だとわかったのは、数回デートを重ねてひと月後、青年に抱かれた後である。池袋の裏手に隠れるように建った安普請のアパートの一室は乱雑にちらかり、布団を敷く余裕もなかった。初めての男との行為は、たがいに服を着たままだった。律子は、疾走するバイクの後席からふり落とされるような不安のために、ただ夢中で男の体にしがみついていただけだった。

終わった時、イヤリングの片方が耳からはずれ部屋の隅に転がっていた。

「ずいぶん遠くまで転がったんだな」

青年は自分が女に与えた激しさに満足したように薄く笑って言った。

それが宗田拓也である。

宗田の薄笑いを見るたびに、律子は自分の肌のどこかに破れ目があり、そのかすかなすき間から体の奥底を覗きこまれているような気がした。

四年が過ぎ、今も窓の外を眺めている宗田の横顔は同じ微笑を浮かべている。下方に広がる街は真夏の白さに焼きつくされ、線だけを残して死んだように見える。

律子は体に微震のような軽い揺れを感じていた。最初それを光の眩しさのせいだと思ったのだが、すぐに別の理由に気づいた。

夫との新婚旅行先の志摩半島で買った真珠のイヤリングを律子はつけていた。耳から細い糸のような金属で短く垂れさがったその真珠がかすかに震えているからだ。部屋には冷房がかかっていたが、窓辺には空気の流れがなかった。

それなのにイヤリングだけが揺れていた。

耳朶の柔らかさだけが、まだ四年前のひと夏の激しさの余韻を憶えているかのように。

「あなたの方は何故なの。何故今ごろになって突然電話をかけてきたの」

「俺の方は、あれから一度も君のことを忘れなかったからだ。あんな風に俺は棄てられたんだから」

宗田はふり向くと、ごく自然に視線の焦点をイヤリングへと絞り、同時にその手を耳へと伸ばしてきた。律子は手で切るようにその手を払いのけ「棄てられたのは私の方だわ」そう言った。

「あなたにはあの女の人がいたじゃない」

「あの女とは別に何もなかった。君が誤解しただけだ」

「彼女にも同じことを言っただけでしょう」

怒ったら逆に自分が今も宗田を忘れずにいることを認めることになる、それがわかっていながら、律子は声を荒げた。案の定、宗田はむしろその怒りを喜ぶように薄笑いで律子の顔をなめ続けた。その微笑は律子が何故、四年ぶりに自分に逢うのにイヤリングをつけてきたかまで見ぬいていくかのようだった。本当にそうなのだろうか。この男が今考えているように、自分は、あのひと夏の夜が忘れられずにイヤリングをつけてきたのだろうか。律子はふと自信をなくした。

あのひと夏、イヤリングは夜と二人の行為とをいつも小さく飾り続けた。最初の晩イヤリングがはずれたのを面白がって、男はその後の抱擁でも律子の耳にイヤリングだけを残したままにさせた。律子が服を脱ぎ終えると、伸びてきた男の手は最初にまず、少しだけイヤリングのねじを緩めた。それがその夜一晚の激しさが開始する合図だった。

果てた後、男の目は真っ先に、耳飾りがその晩は部屋のだこまで遠くに転がったかを見ようとし

た。

あのひと夏、イヤリングは何度律子の耳を離れ、畳の上を転がったのだろう。そうしてそれが耳から落ちなくなり、落ちても髪の手端にからむほどにしか転がらなくなつた頃、律子は宗田と待ち合わせした喫茶店で一人の女を見たのだった。

待ち合わせの時間をまちがえ一時間早く喫茶店のドアを開けたのが原因だった。宗田の広い背中に隠れ、律子はテーブルに近づくまで宗田と向かい合つて座っている女に気づかなかつた。「馬鹿だなあ、きちんと結婚の約束は守るよ」宗田はその女に向けてそう言つてから、やつと背後の人の気配に気づいてふり返つた。首をねじり、今にも崩れ落ちそうな危険な傾斜をもつた視線で、ただ黙つて律子を見あげていた。いつの間にか夏は終わり、街には初秋の風が吹いていた。店のガラス張りのむこうを流れる風よりも男の無言の目の方がひんやりとしていた。

女がどんな顔だったか、その時どんな表情をしていたかはもう憶えていない。鮮やかに思いだせるのは、女がふつと耳へと手を寄せ、ゆるみかけたイヤリングを締め直そうとした、その指のしなやかすぎる動きだけである。この喫茶店に来るまで間違いなく、まだ日の暮れきらないうちからどこかの部屋でその指は宗田の体を這っていたのだ。たぶん自分の指よりももっと器用な動きで——律子には何も言えなかつた。ただ黙つて二人に背を向け、喫茶店を出た。その頃には律子はもう、宗田が健康そうな外見とは正反對の、卑怯さを病巣のように体に抱えこんでいる男だとはわかつていた。

「医師になるために生まれてきたような、そんな使命感を子供の頃から覚えていた」

律子を抱く前にはそう言っていたのが、抱いた後には「医師なんてどうせ忙しいだけが仕事なん

だから」という投げやりな言葉に変わった。春ごろに仙台の両親と喧嘩して送金をとめられ、適当なバイトで生活費を稼ぎながら、情性だけで大学に通っていることも知った。三年浪人して大学に入ったことも隠していたし年齢も偽っていた。

自分では何一つ努力せず、絶えず世の中や他人に不満を抱き、逢うたびに教授や三歳年下の同級生の悪口をぶつけてきた。嘘は、律子を抱く激しさにも感じとれた。夏が終わる頃には「俺はもう大学をやめるよ」と言いだすようになっていたが、同じ飽きっぽさでいつ「俺はもう君をやめるよ」そう言いだすかもしれない危険性が、宗田の体の見せる激しさにもつきまといつていった。

こんな将来のない男と泥沼のような関係が続けていても仕方がない、理性ではそうわかっても理性とはかけ離れた部分で、律子は男のそんな危険さや卑劣さまでを求めてしまう自分をどうすることもできなかった。

四年前のあの頃を思いだすと、あれが本当に自分の体だったのか、今の律子には信じられない気さえする。いや、あの頃でさえ、どうしようもない男との泥沼に似た関係に溺れていた体が自分のものだとは信じられなかった。

それまで女としては地味な生き方を通してきた自分に何が起こったのかもわからなかった。宗田に初めて抱かれた晩、何か特殊な手術でも受けたかのようにそれまでの体が別の体に変わったとは思えなかった。

喫茶店で何も口にしなかった宗田は、その晩電話をかけてきて言い訳がましい声を出した。あの女に向けて「結婚」という言葉をはっきりと口にしたのを律子が聞いたのはわかっているはずなのに「あの女とは何でもないから」平然とそんな弁解をした。律子は黙って電話を切った。

電話は翌日の晩から執拗に鳴り続けたが、律子は受話器をとらなかつた。そしてある晩その音は絶えた。不意に空しく広がった秋の夜の静寂の中で、律子は初めて泣いた。電話が鳴つても出るつもりはなかつたのに、そのベルの音を待ち続けている馬鹿な自分に気づいたからだつた。

それから二か月間、電話の音を待ち続け、毎晩のように一人声を出して泣き、秋の終わりに律子は東北本線で十和田湖へ向かつた。

東北の湖にはもう冬が始まつていた。日没前に宿を出たから陽はまだ西の端に残っていたが、凍りつくほどの冷たい風が湖からも周囲に連なる山々からも色を奪い、果てしなく広い風景の何もかもが真冬に向けて崩れ落ちようとしていた。

絵葉書きが売り物にしている、湖水までを燃やしつくそうとしている紅葉の色を想像するよすがもなかつた。それなのに、広大な景色が隅々まで灰色一色に塗りつぶされているというのに、そのかた隅に小さく立った自分の体だけに、生々しく赤くひと夏の色がしがみつくように残っていた。

律子はその色を無彩の冬の湖へと棄てに來たのだつた。東京からハンカチに包んでもつてきた物を律子は冷えきった手でバッグからとりだした。十二対のイヤリングだつた。十二というその数字を今でもはつきりと憶えている。一対が二つずつ、その夏の間律子が新しく買った耳飾りは両手からも溢れ落ちるほどで、西に大きく崩れようとしている入り陽の弱い光を浴び、微生物のように蠢いて見えた。金や銀、エメラルド、真珠。すべて安物の模造品でありながら、その夏の一晩一晩の思い出をさまざまな色と形に変え、つかの間だが律子の手の中で生命でももつたかのように美しく光っていた。

律子はその一つずつを湖面へと棄てた。鉛のように重そうな水はあつけなくそれらを飲みこみ、